

令和 元年 5 月 21 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17478

研究課題名(和文)多様な形式・内容の入試における発達障害学生支援のあり方

研究課題名(英文) Support for Students with Developmental Disabilities in Various Types of Entrance Examinations

研究代表者

立脇 洋介 (Tatewaki, Yosuke)

九州大学・アドミッションセンター・准教授

研究者番号：50511648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では筆記型試験だけでなく面接なども用いる多面的な入試において、発達障害の中のASDの学生がどのような支援を必要とするのかを検討した結果、以下の2点が明らかになった。第1にASD傾向と多肢選択型試験の成績との間には関連が見られなかった。第2に、ASD傾向は教科の試験や小論文試験への自信と関連していなかったが、ASD傾向を有するほど、面接試験や志望理由に対する自信が低いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果から、ASDの学生の場合、診断名だけでは有効な支援を決定することが難しく、試験での具体的な困難さについても、考慮していく必要性が示唆された。さらに、評価基準があいまいな志望理由や面接などの試験においてより困難さを示すため、評価基準を明確にした上で支援を決定する必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined what kind of support students with developmental disabilities (ASD) needs in an entrance examination that uses various tasks (written examination, interview, motivation for applying, etc.). As a result, the following two points became clear. First, no association was found between the ASD tendency and the results of the subject examination. Second, although the ASD tendency was not associated with confidence in the subject examination or essay test, it became clear that the more the ASD tendency, the less confidence in the interview test and the motivation for applying.

研究分野：特別支援教育

キーワード：発達障害 大学入試 受験上の配慮

1. 研究開始当初の背景

日本では、初等中等教育に比べて大学における障害のある学生への支援が遅れている。日本の大学において障害のある学生の受け入れが進んでこなかった要因の一つとして、入試における障害学生支援の不足が挙げられる。特に、見えにくい障害である発達障害は、症状の個性性という特長から、視覚障害の学生への点字教育のような共通した支援が難しいこともあり、支援が遅れていた。ただし、2016年に施行された障害者差別解消法によって、入試を巡る状況が大きく変わった。教育機関は、入学後の教育だけでなく、入試においても合理的配慮を提供することが必要となった。

一方、2020年度から大学入試改革が実施される。試験内容や実施方法など、様々な点が変わる予定であり、障害学生の支援に関しても、様々な影響が予想される。例えば単純な知識だけでなく、正解のない問題の導入や、筆記試験とともに高校の調査書や面接なども用いた多面的な評価が提案されている。これらの新しい試験に対して、既存の支援を充実させることで対応できるのか、新しい支援等が必要なのかを検討することは喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究では、身体障害に比べて支援が遅れている発達障害のうち ASD に注目し、ASD の学生が試験において必要な支援を検討する。具体的には、以下の2点を検証する。

第1は、ASD 傾向と筆記型試験の成績との関連である。ASD 傾向の学生は、時間制限や特殊な環境など様々な要因によって、筆記型試験においても困難さを示すことが予想される。教科の学力に関する実際の試験を用いた実験によって、ASD 傾向と試験の成績との関連を明らかにする。第2に、多面的評価における ASD 傾向の学生の困難さを検証する。教科の試験や高校の調査書や面接など多面的な評価において用いられる様々な内容をどのようにとらえているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

研究1：筆記型試験の成績

手続きと参加者：参加者は東京都内の6つの国立大学に通う大学1年生333人。都内の試験会場に集められ、別の実験も含めて延べ4日間にわたって実施し、全てのテストに誠実に協力した場合のみ、謝金を支払うことを説明した。

教科の試験：教科の試験の題材としては、平成29年度大学入試センター試験の本試の問題を用いた。ただし、理科と社会については、参加者によって受験した科目が異なっていたため、全参加者が同じ問題を回答した「国語」「英語筆記」「英語リスニング」「数学・数学A」「数学・数学B」の5科目を分析に使用した。

ASD 傾向：自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林ら, 2004)を用いた。

研究2：多面的評価における困難さ

手続きと参加者：調査会社に登録されたモニターを利用する公募型 Web 調査を行った。まずスクリーニング調査によって、大学進学を希望する高校1、2年生を抽出した。条件に合致した人に本調査の依頼を行い、学年と性別を組み合わせた4群、それぞれ100人を目標とし、回答の募集を行った。参加者には調査会社から謝礼としてポイントが支払われた。最終的に412人の有効回答を得た(男性206人、女性206人)。

入試での評価に対する自信：入試で評価される内容を12項目設定し、「次の内容を評価される場合、あなたはどの程度自信がありますか」と尋ねた。12項目は、「教科の試験」「小論文」「面接」「内申書・調査書」「その学校を志望した理由」「英語の民間試験」「高校の探究活動などの授業の成果」「高校での生徒会や委員会の活動」「高校での行事の取り組み」「部活動やコンクールの結果」「英語以外の資格や検定」「ボランティアなどの社会活動」である。回答は「まったく自信がない(=1)」から「非常に自信がある(=4)」の4件法で求めた。

ASD 傾向：自閉症スペクトラム指数(AQ)の10項目短縮版である AQ-J-10(Kurita et al., 2005)を使用した。

4. 研究成果

研究1：筆記型試験の成績

AQ のカットオフポイント以上の28人と未満の305人に分け、教科別に平均値を算出し、t 検定を行った(表1)。国語、英語筆記、リスニングの3科目では、群間で有意な差が見られなかった。一方、数学・数学Aと数学・数学Bの2科目では、有意な差が見られ、AQ 高群の方が平均値が10点以上高かった。

研究1では予測とは異なり ASD の傾向があるほど、数学の得点が高いという結果が得られた。ASD 傾向と数学との関連の理由としては、大学での専攻が影響した可能性が考えられる。他の教科と異なり、数学は、大学での専攻が文系か理系かでテストの結果が大きく異なる。AQ の項目には、「数字に対するこだわりがある」など、文系よりも理系の学生に該当しやすい項目が含まれており、それらが影響した可能性がある。

しかし、本研究の結果は、以下の点に注意が必要である。まず、全体としてみると、関連は

弱いものである。また、実験協力者が都内の国立大学の1年生のみであるため、学力上位の層に偏っている。さらに、医師による診断でなく、自己報告式のAQによってASD傾向をとらえている。

そのような限界を考慮したうえで本研究の結果からASDに対する受験上の配慮について述べると、ASDの診断名だけでは、有効な配慮を決定することが困難な可能性が示唆された。そのため、配慮を決定していく際には、具体的な困難さについても、考慮していくことが必要と考えられる。

表1 筆記型試験の成績

項目	AQ高群 (N=28)		AQ低群 (N=305)		t	自由度
	平均値	SD	平均値	SD		
国語	66.6	13.3	67.1	14.6	0.17	331
数・数学A	85.4	12.5	74.9	19.2	4.06**	39.9
数・数学B	76.4	15.2	63.5	24.6	4.02**	41.5
英語筆記	81.1	15.1	81.4	15.8	0.09	331
リスニング	73.6	18.2	77.0	16.0	1.07	331

研究2：多面的評価における困難さ

AQ-J-10のカットオフポイント以上の64人と未滿の348人に分け、試験別に平均値を算出し、t検定を行った。その結果、「その学校を志望した理由」「高校での生徒会や委員会の活動」の2項目で有意な差が見られた。AQ-J-10高群の人は、高校での生徒会や委員会の活動での評価に自信を持っているものの、学校を志望した理由での評価に自信を持っていなかった。

次にAQ-J-10を尺度得点とみなし、各試験への自信との関連を相関分析によって分析した。ASD傾向が高いほど、「その学校を志望した理由」(-.153**)や「面接」(-.153**)の評価に自信がなかった。「高校での行事の取り組み」(-.114*)や「英語の民間試験」(.131**)でも有意な相関が見られたが、0.15未滿と関連は弱いものであった。

以上の結果より、研究2では以下の2点が明らかになった。

第1に、ASDの傾向があるほど、志望理由や面接での評価に自信を持っていないことが明らかになった。受験生にとって、教科の試験と異なり、志望理由や面接は、評価基準があいまいである。そのため、試験実施者の意図を推測することが求められるが、意図の理解が困難というASDの人の特性が反映されたと考えられる。

第2に、「教科の試験」に対する自信とASD傾向との間には、関連が見られなかった。この結果は教科の試験の得点とASD傾向との間に関連が見られないという研究1の結果とも一致する。

したがってASDの人は、これまで配慮が行われてきた筆記型の学力試験より、面接などの学力以外の能力に関する試験で困難さを示すと考えられる。評価基準があいまいなため、これらの試験において、どのような配慮を実施するか、十分な検討が求められる。

表2 入試での評価内容に対する自信

項目	AQ高群 (N=64)		AQ低群 (N=348)		t	自由度
	平均値	SD	平均値	SD		
教科の試験	2.44	0.69	2.43	0.78	0.03	410
小論文	2.30	0.85	2.25	0.85	0.40	410
面接	2.31	1.02	2.47	0.91	1.28	410
内申書・調査書	2.48	0.93	2.43	0.85	0.48	410
その学校を志望した理由	2.63	0.93	2.94	0.82	2.50*	81.6
英語の民間試験	2.34	0.96	2.13	0.87	1.80	410
高校の探究活動などの授業の成果	2.33	1.01	2.31	0.90	0.12	410
高校での生徒会や委員会の活動	2.36	0.97	2.10	0.92	2.08*	410
高校での行事の取り組み	2.44	1.05	2.54	0.94	0.81	410
部活動やコンクールの結果	2.36	1.09	2.17	0.92	1.29	80.4
英語以外の資格や検定	2.31	1.02	2.19	0.94	0.92	410
ボランティアなどの社会活動	2.20	1.01	2.03	0.89	1.25	82.1

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

立脇洋介 2016 11 合理的配慮の提供 大学入試センターでの取り組み 入試における配 - センター試験の受験上の配慮の概要 - LD/ADHD&ASD, 57, 38-39 (査読なし).

橋本貴充・竹田一則・南谷和範・近藤武夫・立脇洋介 2017 障害者差別解消法に対応した大学入試のあり方 - 「合理的配慮の時代」の受験配慮 -, 大学入試研究の動向, 34, 133-170 (査読なし).

〔学会発表〕(計4件)

南谷和範・立脇洋介 2016 タブレットコンピュータを用いた試験問題閲覧システムの開発,
全国高等教育障害学生支援協議会第2回大会.

橋本貴充・竹田一則・南谷和範・近藤武夫・立脇洋介 2016 障害者差別解消法に対応した
大学入試のあり方 「合理的配慮の時代」の受験配慮 , 平成 28 年度全国大学入学者選抜研
究連絡協議会大会(第11回).

Kazunori, M., Yosuke, T., The reform of Japanese university entrance examination system
and an enhance of accommodation for visually impaired examinees., WBU-ICEVI Joint
Assemblies 2016.

立脇洋介 2018 大学入試における合理的配慮のあり方 - ASD 傾向と学力テストとの関連の
検討 -, 日本 LD 学会第 27 回大会.

〔図書〕(計1件)

立脇洋介 2016 大学入試における配慮, 丸善出版, 発達障害事典(日本 LD 学会編),116-117.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。